

vailability and Functions of Practical Training Room in Childcare Practice and Teaching Practice : Guidance Including Mental Support, Employment Support and Learning Support

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): Practical Training Room, Childcare Practice, Teaching Practice, Employment Support, Consulta- tion Support 作成者: TAKAMIYA, Meiko, NAKAYAMA, Misa メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4295

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



保育実習・教育実習における実習指導室の利用状況と機能 —心理的支援、就職支援、学修支援を包括した指導—

児童学部 児童学科 高宮 明子 児童学部 児童学科 中山 美佐

要旨：保育者・教員を目指す学生にとって保育実習・教育実習は極めて重要である。実習指導の内容は実務や実技の指導だけでなく、心理面の支援など多方面にわたる。本学では2005年に実習指導室が設置された。そこでは教員が常駐して、保育所・福祉施設・幼稚園での実習に関する指導を行っている。実習指導室を訪れる学生は年に2000人を超えており、実習の直前・直後はかなり混雑する。来室目的は保育所実習に関するものが最も多く、次は就職相談である。学年別では4回生の来室者が最も多い。学生は、実習指導室がさまざまな実習や就職相談で役にたっていると評価している。実習指導室開設以後の12年間は保育・教育分野の制度改正が相次ぎ、学生の進路が多様化している。実習指導教員は学生への個別指導や相談支援が可能で、就職や学修全般に関するさまざまな相談に応じている。

キーワード：実習指導室、保育実習、教育実習、就職支援、相談支援

1. はじめに

保育者・教員を養成する課程において、保育実習・教育実習（以下、実習と表記）は極めて重要な意味を持つ。実習はこれまでの基礎理論や演習での学びを統合し、実際のこどもを対象にして保育や教育を行う実践の場であり、今後の保育者・教員としての在り方の基礎を作る場である。保育者・教員の質の向上が強く求められる今日において、いずれの養成機関においても実習指導の充実が重要な課題である。一方、学生にとって実習は大きな試練であり、自らの職業適性を見極める場でもある。実習への不安感は非常に大きい。この不安感を扱った研究は数多く、最近の論文としては朝倉・天野・妙楽・多曾田・古舘・桜木(2017)^①、吉村・高垣(2017)^②などがある。教員が学生に行う実習指導の内容は、指導案の作成、実習日誌の書き方、実技、マナー、事務手続き、実習後の振り返りなど広範囲に及び、学生の心理面にも気を配る必要がある。授業科目としての「実習指導」の時間内では、これらすべてを指導することは困難であり、個人に合わせた指導を行うことも難しい。

そこで、本学では実習指導を充実させ、きめ細かい援助を行うため、2005（平成17）年に実習指導室を開設した。実習指導室には3名の教員が輪番で常駐し、「実習指導」の授業時間以外で少人数指導、個人指導、相談支援等を行っている。3名は保育・教育・福祉分野で現場経験があり、保育所・福祉施設・幼稚園に分



写真1 実習指導室（入り口側）



写真2 実習指導室（奥の絵本用書棚）

かれて指導を担当している。本稿の先行研究である阿部（2010）⁽³⁾は、本学実習指導室の開設から4年間の利用状況を、幼稚園教育実習担当者の立場でまとめたものである。しかし、保育者・教員を養成する学校でこうした教員常駐の実習指導室を設置しているところは少なく、研究も安部・原田・石山（2011）⁽⁴⁾など僅かである。

本学の実習指導室は当初は児童学部研究事務室の一隅に過ぎなかったが、やがて独立した一室となり、絵本などを置くようになった。10年後の2015（平成27）年に児童学部のキャンパスが移転したが、実習指導室はスペースを確保して多様な役割を果たしている。そこで、本稿は現在の実習指導室の利用状況を総括し、開設当初と比較した。また学生を対象に質問紙調査を行って実習指導室の役立ち度を検討した。さらに個別で対応した相談事例も紹介して、実習指導室のさまざまな機能を考察する。それによって、今後の実習指導の充実及び就職や学修全般に関する相談機能の充実を図りたい。

2. 実習指導室に来室する学生の目的・学年

(1) 2015・2016年度の状況

この10余年で保育・教育・福祉制度は大きく変化した。特に2006（平成18）年に創設された認定こども園の影響は大きい。公立幼稚園・保育所の多くが認定こども園となり、そこへの就職を目指す学生は保育士と幼稚園教諭免許を必ず取得するようになった。また、長い不況が続いていた間に保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の三種類の免許が取得できる養成校が増えた。本学児童学部では2007（平成19）年入学生から従来の保育士・幼稚園教諭に加えて小学校教諭免許の取得が可能になった。三免許を取得するためには多くの単位が必要であり、実習も4回（介護等体験を含めると5回）必要である。本学の標準的な実習スケジュールを表1にあげた。三免許を取るために学生生活全般が多忙化しており、学生が実習指導室に来る時間も制約が厳しくなっている。

表1 保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の三免許を取得する場合の実習スケジュール

	6月	8・9月	2・3月
2回生		保育実習Ⅰ（保育所）	保育実習Ⅱ（保育所）*
3回生		保育実習Ⅰ（施設）**	
			保育実習Ⅲ（施設）*
4回生	幼稚園教育実習*** 小学校教育実習***		

*一方を選択する。**いずれかの時期に指定される。***一方を選択する。

本学の2017（平成29）年3月卒業生の三免許取得者は134名中111名（83%）である。当然、実習に参加する学生の総数は多い。2015・16（平成27・28）年度の実習参加人数を表2にあげた。

表2 実習参加者（延べ人数）

種別	保育所実習		施設実習		教育実習		合計
	保育実習Ⅰ（保育所）	保育実習Ⅱ（保育所）	保育実習Ⅰ（施設）	保育実習Ⅲ（施設）	幼稚園	小学校	
2015年度	148	108	136	9	104	30	535
	256		145		134		
2016年度	160	124	130	19	95	28	556
	284		149		123		

表2のうち小学校教育実習に参加する学生については、実習指導室担当とは異なる教員が専門的に指導している。その状況は大杉・山本・田村（2017）⁽⁵⁾に述べられている。本稿では保育所、施設、幼稚園担当の教員が対応した実習指導室での指導・相談について述べる。また、本稿では保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱ（保育所）を合わせて保育所実習、保育実習Ⅰ（施設）と保育実習Ⅲ（施設）を合わせて施設実習と呼ぶ。幼稚園教育実習は幼稚園実習と呼ぶ。

実習指導室の開室時間は学期中の平日（木曜午後を除く）の10:30～13:30と13:30～16:30である。本稿ではこの3時間を1回と数える。従って通常は週に9回開室し、その時間には実習指導教員が輪番で常駐する。なお8月～9月にも開室時間を設けており、実習担当以外の教員が輪番で常駐しているが、来室者が少なく、本稿では除外した。

表3に来室目的別の来室者の集計、図1にその比率をあげた。来室目的は学生が初めに教員に告げた要件で記録しているため、実際には相談の中心が別件に移ることもある。それについては相談事例で紹介する。

表3 来室目的別の延べ人数

	開室回数	来室者合計	保育所実習	施設実習	幼稚園実習	就職関連	その他
2015年度	255	2080	889	237	307	405	242
2016年度	249	2054	698	397	225	418	316

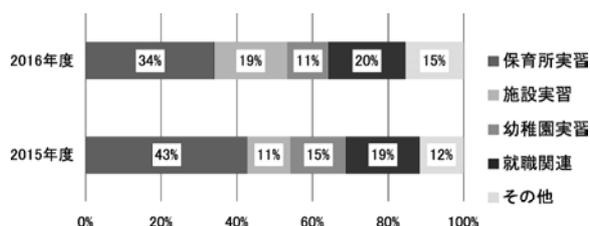


図1 来室目的別の人数比率（年度別）

まず来室者の総数は年間 2000 人を超えており、非常に多い。2015 年・16 年とも 1 回の開室について平均 8.2 人が来室している。実習生一人当たりでは 2015 年は 3.9 回、2016 年は 3.7 回来室している。来室者の中には教員に呼び出された者と自発的に来室した者が含まれている。前者の例としては提出物が未完成の学生や欠席者の補講がある。後者の代表的なものは、実習前にグループで来室し、先輩が残した実習の振り返り記録を見る学生である。そこで先輩が使った教材や音楽を知り、実習指導室に備えた図書や楽譜で調べたり、ピアノの練習をしたりする場合もある。学生がこのように自主的に来室して実習指導室を活用していることが、実習指導室の大きな特徴である。

開室回数及び来室者合計では 2015 年と 2016 年の間に大きな差は見られない。しかし、来室目的を見ると年度によりかなりの差があることが分かる。来室目的では保育所実習のための来室者が最も多い。これは保育実習Ⅰ（保育所）が必修科目である上に、保育実習Ⅱ（保育所）の選択者が保育実習Ⅲ（施設）の選択者より圧倒的に多いためである。2016 年の場合、前者は 124 名、後者は 19 名である。保育所実習は実習の中では最も早く、2 回生で行われるため、丁寧な指導が必要である。これも来室者が多い原因である。次に多いのは就職関連である。阿部（2010）も就職相談が増えていることに言及しているが、現在では施設実習・幼稚園実習の来室者よりも就職関連で来室する学生の方が多い。2016 年の就職関連の来室者 418 名のうち、87%にあたる 364 名が 4 回生である。就職についてはキャリア・センターと協力して指導・相談を行っている。実習指導教官は 3 人で年間 180 件の訪問指導を行っているため実習園（就職先）に関する詳細な情報を持っており、また就職試験に必要な実技（製作、手遊び、絵本読み、ピアノ、歌唱など）の指導ができるため、繰り返し実習指導室に相談に訪れる学生が多い。

「その他」の目的での来室者もかなり多い。その多くは実習指導室にある参考書・絵本・楽譜などを閲覧したり、帯出・返却したりする学生である。2016 年の年間貸出冊数は 123 冊である。その内訳は就職・資格関係が 57 冊と最も多く、次いで絵本 38 冊、楽譜 12 冊であった。図書を帯出した学生の 75%が 4 回生であり、「その他」の多くが就職と間接的に関わっている。一方、「その他」の中には履修科目や学費の相談など学修全般に関わるものも含まれる。少数ながら退学を考えるような深刻な事例もあり、十分に時間をとった相談が必要である。それ以外ではボランティア

活動の紹介、卒業論文の支援、進学・留学相談、実技指導などが「その他」に含まれている。

次に学年別の来室者数とその比率を表 4 と図 2 にあげた。ただし、来室者は特定の時間に集中しやすく、学年が把握できない場合も少なくない。このため、見学者、卒業生等とまとめて「不明・その他」とした。学年別では最も多いのは 4 回生である。4 回生が参加する実習は教育実習（幼稚園・小学校）のみだが、就職相談で来室する学生が多いため最も多くなっている。実習が無い 1 回生の来室が最も少ないことは自然な結果であるが、2 回生と 3 回生については、2015 年は 2 回生が多く、2016 年は 3 回生の方が多い。前出の来室目的別集計においても、2015 年には保育実習のための来室者が多かったが、それはほとんどが 2 回生である。2016 年は施設実習のための来室者が多かったが、それは 3 回生である。この学年の実習指導室来室者が他学年より多いと考えられるが、この現象がなぜ起きたかは不明である。

表 4 来室者の学年別人数

	1回生	2回生	3回生	4回生	学年判明者の計	不明・その他	合計
2015年度	67	633	546	760	2006	74	2080
2016年度	11	518	646	762	1937	117	2054

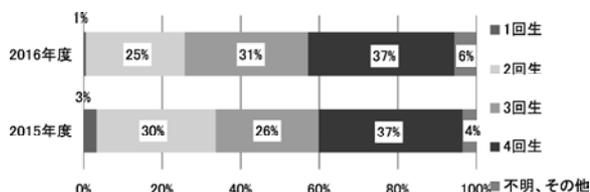


図 2 来室者の学年別比率（年度別）

表 5 と図 3 には 2016 年度の月別の来室者数の変化を示した。実習中（6 月、8・9 月、2・3 月）は実習指導教員が訪問指導に出ているため、実習指導室の開室回数が少なく、来室者数も少ない。来室者が多い時期は、実習の種類によって異なる。まず 2 回生が参加する保育所実習では、年度初めの 4 月と 10 月・11 月に来室者が多い。実習の事後指導が行われる時期である。3 回生が参加する施設実習の場合は 5 月と 10 月・11 月が多く、これも実習の事後指導の時期である。4 回生が参加する幼稚園実習の場合は実習前の 4 月・5 月と実習直後の 7 月が多い。就職関連は 7 月がピークだが、9 月以降も少なくない。このように来室者は実習の種類によって短期間に集中する。しかも学生の授業の空き時間は少なく、特定の時間に集中して来室することが多い。その時期には待ち時間が長くなり、

表5 来室者数の月別の変化（2016年）

	4月	5月	6月*	7月	8月**	9月**	10月	11月	12月	1月	2月***	3月***	合計
保育所実習	116	41	59	81	0	16	196	101	38	50	0	0	698
施設実習	48	82	9	52	0	12	86	56	15	37	0	0	397
幼稚園実習	56	115	7	43	0	1	0	2	1	0	0	0	225
就職関係	51	26	4	121	0	34	73	71	26	12	0	0	418
その他	57	86	7	28	0	29	28	39	18	24	0	0	316
月別合計	328	350	86	325	0	92	383	269	98	123	0	0	2054
開室回数	25	33	15	38	0	11	37	36	27	27	0	0	249

6月 *幼稚園実習の訪問指導のため、実習指導室の開室回数は少ない。

8月・9月 **保育実習Ⅰ(保育所)・保育実習Ⅰ(施設)の訪問指導のため実習指導教員が不在である。他の教員による指導はあるが、含んでいない。

2月・3月 ***保育実習Ⅰ(施設)・保育実習Ⅱ(保育所)・保育実習Ⅲ(施設)の訪問指導のため実習指導教員が不在である。閉室している。

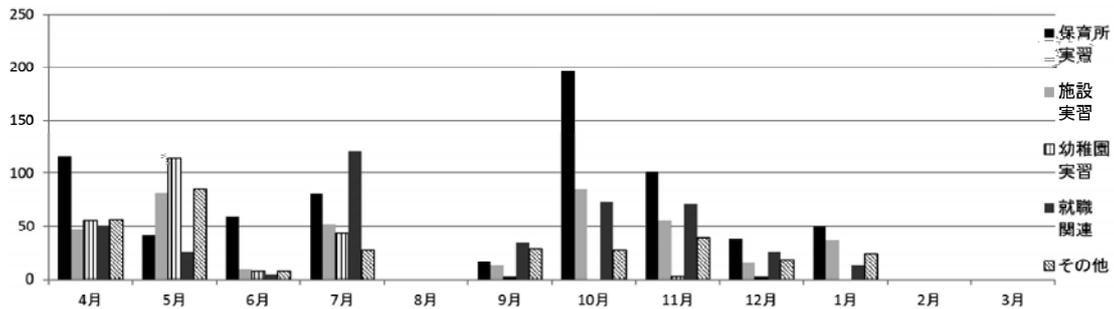


図3 来室者の月別の変化（2016年度）

個別相談は困難になるので、学生からは「混雑を解消してほしい」という要望が出ている。どの実習にも共通している事項や資料の閲覧などは、別の実習担当者でも対応して利便性の向上を図っているが、学生の要望に十分応えるところまではいかない。

就職相談・学修相談などは担当者を限定せず、学生の来室時に当番である教員が行っている。3人の実習指導教員は全員相談支援業務の経験があり、保育所、施設、幼稚園の3種類にまたがって訪問指導を行っているので、共通した基盤がある。学生に対して他の実習指導教員にも相談するように促すことは珍しくなく、相補的な指導・相談体制をとっている。このように、保育所実習担当、施設実習担当、幼稚園実習担当という枠組みは維持しながら、実情に応じて柔軟な対応を行っている。

その後10年間で内外の環境が大きく変化し、実習指導室の役割も変化した。表6は阿部の記述と2015・2016年の幼稚園実習担当者の対応実績を比較したものである。現在は小学校で教育実習を行う学生が30名程度いるため、幼稚園実習に参加する学生はかなり減った(表2)。実習期間についても当初は幼稚園実習の期間は数か月にわたっていたが、現在は6月に限定されている。このため幼稚園実習に関わる来室者は全体的に減っており、9月以後の来室者は僅かである(表5、図3)。しかし、幼稚園実習担当者が保育所実習・施設実習といった他学年で行われる実習にも対応しているため、対応した学生の総数はそれほど変化していない。

就職に関する相談は実習指導室開設時からあり、2008年まででも毎年増加している。それと比べると

表6 幼稚園実習担当者の対応実績 2005-2008年と2015-2016年比較

	開室回数	対応した件数・人数	幼稚園実習参加者	保育所実習	施設実習	幼稚園実習	就職	その他	
2005年度	102	525	127	件数	/	384	139	2	
				%	/	73%	26%	1%	
2006年度	80	472	147	件数	/	294	166	12	
				%	/	62%	35%	3%	
2007年度	94	654	142	件数	/	341	233	80	
				%	/	52%	36%	12%	
2008年度	91	672	132	件数	/	320	290	62	
				%	/	48%	43%	9%	
2015年度	81	545	104	人数	129	36	197	114	69
				%	24%	7%	36%	21%	13%
2016年度	82	556	95	人数	68	54	126	195	113
				%	12%	10%	23%	35%	20%

2005~2009年度は阿部(2010)より作成

(2) 10年間の状況の変化

阿部(2010)⁽³⁾が記しているのは、実習指導室が設置された2005年から4年間の状況である。実習指導室開設時は認定こども園という制度はなく、また本学には小学校教員養成課程がなかった。従って4回生の実習先は幼稚園のみであり、就職先もほとんどが幼稚園か保育所であった。この時期は幼稚園実習担当者である阿部が4回生ほぼ全員を指導し、就職にも関わっていた。

2015・16年に対応した人数の方が少ないが、これは幼稚園担当者以外も就職相談に対応しているためである。2015・2016年に就職相談で来室した学生数は全体では400人を超えている(表3)。しかも近年、認定こども園、小学校、一般企業への就職者が増え、就職相談の内容が多様化・複雑化している。例えば公立認定こども園か私立幼稚園か、小学校か幼稚園か、一般企業か保育園か、企業型保育所か一般的保育所か等々、10年前とは異なる内容の就職相談が少なくない。実習指導室が就職指導・相談に深くかかわっているのは本学児童学部の大きな特徴であり、今後この役割はますます重要になっていくと予想される。

2005～2009年度においても、2015～2016年度においても、来室者数や来室目的別の人数が年ごとにかなり変動している。制度変更などの外的環境変化の影響もあるが、学年ごとや年度ごとに来室者の傾向はかなり変化していると考えられる。

なお、阿部(2010)⁽³⁾によると2005～2009年では

メールでの実習指導が活発に行われ、2006(平成18)年には年間受信数が157件に及んだ。現在もそのシステムは続いているが、メールはすでに学生が日常的に使う連絡手段ではなくなっており、年間受信数は10件未満に激減している。

3. 学生が評価する実習指導室の役立ち度

学生にとって実習指導室がどの程度役立っているかを知るため、質問紙調査を行った。

(1) 対象者：本学3回生・4回生

(2) 調査時期：2016年。3回生は9月、4回生は7月。それぞれ実習終了後の「実習指導」の授業時間。

(3) 有効回答数：196名。3回生は保育所実習と施設実習の両方を終了した者84名。4回生は保育所実習・施設実習・教育実習のすべてを終了した者112名。4回生のうち、幼稚園実習参加者は88名、小学校実習参加者は24名である。

(4) 質問内容と結果 表7

表7 学生による実習指導室の役立ち度評価(2016年)

	全体 n=196		3回生 n=84		4回生 n=112		幼稚園実習 n=88	
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差
I. 保育所実習に関して(対象3回生・4回生)								
下の項目について実習指導室はどのくらい役に立ちましたか。								
1. 全く役に立たなかった 2. あまり役に立たなかった 3. かなり役立った 4. 大変役立った								
A. 実習先の保育所の情報を得る。	2.7	0.80	2.9	0.75	2.6	0.81		
B. 実習に対する不安や悩みを相談する。	2.8	0.84	2.9	0.83	2.7	0.83		
C. 保育内容の立案・決定。	2.4	0.89	2.5	0.92	2.3	0.84		
D. 実習終了後、成績を見たり、事後指導を受けたりする。	3.2	0.78	3.1	0.85	3.2	0.71		
II. 施設実習に関して(対象3回生・4回生)								
下の項目について実習指導室はどのくらい役に立ちましたか。								
1. 全く役に立たなかった 2. あまり役に立たなかった 3. かなり役立った 4. 大変役立った								
A. 実習先の施設の情報を得る。	2.6	0.91	2.9	0.82	2.4	0.91		
B. 実習に対する不安や悩みを相談する。	2.5	0.92	2.9	0.85	2.3	0.90		
C. 保育内容の立案・決定。	2.2	0.88	2.4	0.95	2.0	0.79		
D. 実習終了後、成績を見たり、事後指導を受けたりする。	2.7	1.02	2.6	1.02	2.8	1.00		
III. 幼稚園実習に関して(対象4回生の幼稚園実習参加者)								
下の項目について実習指導室はどのくらい役に立ちましたか。								
1. 全く役に立たなかった 2. あまり役に立たなかった 3. かなり役立った 4. 大変役立った								
A. 実習先の幼稚園の情報を得る。							3.1	0.89
B. 実習に対する不安や悩みを相談する。							2.9	0.86
C. 保育内容の立案・決定。							2.6	0.91
D. 実習終了後、成績を見たり、事後指導を受けたりする。							2.8	0.94
IV. 実習以外でも実習指導室はさまざまな相談のついでに。								
以下の項目について、実習指導室はどのくらい役に立ちましたか。(対象3回生・4回生)								
1. 全く役に立たなかった 2. あまり役に立たなかった 3. かなり役立った 4. 大変役立った								
A. 就職に関すること(相談、書類の記入、面接練習、図書の出借など)。	2.4	1.04	2.1	1.07	2.5	1.00		
B. ボランティアやアルバイトに関すること。	1.9	0.89	1.9	0.96	2.0	0.83		
C. 実技に関すること(ピアノ、制作、絵本読みなど)。	2.3	1.00	2.2	1.07	2.4	0.94		
D. 資格取得に関すること(資格関係の科目選択を含む)。	2.1	0.97	2.1	1.07	2.1	0.89		

(5) 考察 保育実習・施設実習・幼稚園実習に関する質問（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）では、実習先の情報収集（質問 A）、不安や悩みの解消（質問 B）、成績閲覧・事後指導（質問 D）の平均が 2.5 を超えており、実習指導室は学生にとって役に立っていると言える。特に 4 回生の幼稚園実習（Ⅲ）については役立ち度の評価が非常に高い。幼稚園実習は他の実習に比べて期間が長い上に、実習時（6 月）に就職試験が始まっており、実習が就職に結びつく場合もある。このため実習前の 5 月には幼稚園実習のための来室者が多く、実習直後の 7 月は就職相談が最も多くなる（図 3）。来室者が多いことは役立ち度の評価の高さに結びついている。ただし、4 回生にとって保育所実習・施設実習はかなり前の経験であるのに対し、幼稚園実習は直前の経験である。幼稚園実習が終わった直後は、その役立ち度評価が高くなる可能性がある。

全体的には 3 回生の方が 4 回生より役立ち度を高く評価している。特に施設実習（Ⅱ）において 3 回生と 4 回生の差はかなり大きい。この学年は 2 年時の保育実習においても 3 年時の施設実習においても、実習指導室への来室者が他学年より多い。来室者が多い学年が役立ち度を高く評価するのは自然である。ただし、ここでも、前年度に行われた保育所実習に比べて、調査直前に終わった施設実習の方が実習指導室の役立ち度が高く評価されている可能性がある。

保育所実習と施設実習の比較では、全体的に保育所実習の方が役立ち度は高く、標準偏差は小さい。この原因の一つは実習の性質の相違が考えられる。保育所実習は初めての实習であり、きめ細かな指導が必要であるが、共通性のある指導ができる。一方、施設実習は児童養護施設、乳児院、母子支援センター、障害児（者）施設など多種類の施設で行われ、施設ごとに入所・利用児（者）の特性が異なり、保育士の役割も異なる。また、入所・利用児（者）の安全確保やプライバシー保護のため、外部に公開されている情報は少ない。学生にとっては経験・情報が少ない上に、多くが宿泊実習であるため不安感が強い。そうした不安を完全に払拭することは難しい。このため、実習指導室の役立ち度の評価は個人により大きく異なると思われる。

今回の調査は、2 種類以上の実習を経験した 3・4 回生を対象とした。しかし、この調査の結果からも、また来室者の集計からも、年度や学年によりかなりの変動があることが分かった。実習指導室の役立ち度を検討するには、保育所実習を終えた直後の 2 回生の調査が必要であり、今後の課題として縦断研究・横断研

究を組み合わせた調査を行いたい。

4. 相談事例

実習指導室は教員が学生と個別に語りあえる場所である。このため、実習に関する具体的な指導を行っているうちに、次第に話が発展して、本来の悩みが見えることがある。その場合はカウンセリング的な相談支援を行う。ここではそのような事例を 3 件紹介する。

<事例 1 保育者に向いてないと思っていた学生>

2 回生の学生 A が、初めての保育所実習を終えて実習指導室に報告に来た。笑顔いっぱい「楽しかった」と語り始めた。「実習に行く前は、私は保育者には向いてないと思っていた」「今までの経験では、小さい子どもは私の顔を見ただけで泣き出していた」と話した。しかし、実習に行ってみると、「先生、遊ぼう」「先生、一緒かけっこしよう」と子どもたちが朝から帰るまで自分のそばから離れなかったという。語る様子は、本当に嬉しそうで、保育者になる自信につながったと感じた。学生 A は、普段は耳や唇にピアスを幾つもつけ、服装は黒一色、ボーイッシュなスタイルである。趣味はロック音楽で、ドラムやギターを弾いている。確かに、普段の彼女の外見だと、子どもの目には怖いと映るかもしれない。しかし、筆者はその部分には触れないようにした。きっと実習中はメイクもせず、もちろんピアスも外し、一般的な実習生の服装であっただろう。子どもたちの目には優しいお姉さん先生と映ったであろう。話し方は少しぶっきらぼうだが、裏表なく、思ったことを素直に口に出せる学生である。子どももまた、思ったことを素直に言葉や表情に出すものである。子どもたちはこの実習生と遊んで楽しかったに違いない。実習中に彼女のいいところがたくさん出せて、いい体験に繋がったと感じられた。彼女はなぜ自分の顔を見ると子どもが泣き出すのかわからない様子であった。「大学には人生の保険と思って入学した」という。「免許を持っていたら何かあったときに役に立つ」「仕事がなくとも何とかできる」と思って入学した。「保育者になるつもりはなかったけど、ライブに行くと会場に子どもを預かる所もあるから、そんな所で仕事をしてもいいなと思った」と話した。学生 A の場合は、最初の実習でたくさんの子どものそばに来てくれたことが驚きであり、自分に対する新たな発見であっただろう。今後、更に自分自身で子どもの目線に気付き、成長してくれればいいと感じた。

その後、学生 A は何度か実習指導室に来たが、やがて、だんだんと来なくなった。授業時間内の実習指導は集団指導であり、学生の個人的な話を一人ずつゆっくり聞くことはできない。それに対して実習指導室には個々で話ができる良さがある。彼女には自分の良さを自分で見つけて、良い保育者になってほしいと思う。しかし、それを決めるのは彼女自身である。筆者はどこまでも学生の想いに寄り添い、本人の想いを大切に話していき、最終的には自分で答えが見つけれられるように導くことを心掛けている。実習指導室の教員は相談者としての在り方を常に考慮することが必要であろう。次に彼女が来るのは2度目の実習を終えてからになると思った。

このように、学生は何かあれば実習指導室を訪れる。どちらかというとき、苦しいとき、悲しいときなど、マイナスの気持ちの時に訪れることが多い。学生 A のように嬉しい、楽しいなどプラスの想いを伝えに来る学生は少ないものである。しかし、彼女の嬉しそうな表情の後ろには、自分は保育者には向いていないのではという悩みが隠れていたのである。

<事例2 実習ノートが未完成であった学生>

最初の保育所実習が終わり、学生は実習ノートを実習先に提出しなければならなかった。しかし、学生 B はなかなか提出しない。実習園からは実習ノートの提出がなければ実習はなかったことにするという連絡が来ていた。保育所実習担当教員が何度となく学生 B に連絡をしたが、応答が無かった。訪問指導を担当した筆者も何度か彼女にメールを送り、ようやく返信があった。このままでは結果としては実習中止になる、至急実習指導室に来るようにと伝えた。ほどなくして実習指導室にやってきた学生 B は、「ノートが仕上がっていない」「書いてないところがある」と言う。彼女は実習期間に園に行くだけで実習は終わったのだと思い込んでいた。実習とはどういうものかを再度説明し、実習ノートを提出しなければ実習を終えたことにならないと伝えた。彼女はとても困った様子であった。このまま彼女を帰すと実習ノートは出せない恐れがあった。筆者は「この問題は今解決しよう」とノートの仕上げに付き添った。そして、筆者の目の前で学生 B が実習先に謝罪の電話を入れるようにした。こうして実習ノートは仕上げ、実習ノートを提出する日も決めることができた。彼女はホッとした顔になった。そして「正直なところ実習はもういいかと思っていた」と話し始めた。学生 B は普段から授業を休みがちで、

何か嫌なことがあったらすぐ逃げるようなところがある。それは今後の生き方にも影響するのではと思われた。彼女には叱る指導よりも話をよく聞き、寄り添うように指導していくことが必要だと感じた。ゆっくり話を聞いていくうちに、「実習自体がしんどかった」「保育者にはなれないと思う」と話し始めた。しかし、子どもは好きで、子どもと一緒にいると楽しいと語り、だんだん笑顔が出てきた。何をしている時が楽しいのか、何をすることが自分にとって苦手なのか、次第に自分の言葉で表現できるようになり、最後には次の実習にも行く決意を語った。

彼女のように、保育者になりたいという希望はあっても、自分で無理だと思ってしまう学生もいる。励ますだけでは解決しない。学生が目指している目標は、少し頑張れば手が届くレベルだと具体的に話を伝えることが必要である。このように、実習指導室は実習の仕上げを終えていない学生も指導し、保育者になることに関する相談に応じている。

学生 B は次の実習ですべてを自力で終えることができた。筆者は次の実習でも偶然彼女の訪問指導を担当したため、その成長を見てとることができた。彼女はしっかりした保育者として、まだまだ成長するであろうと感じた。学生 B はこれ以降、時々、実習指導室に顔を出すようになり、嬉しいことや、悩んでいること、友人の事などを話してくれるようになった。なんでも話せる、伝えることができる場所として実習指導室は活用されている。

<事例3 就職先に悩む学生>

6月の教育実習が終わると、4回生が一気に就職に向かって走り始める。就職相談は7月に急増する。中でも多い相談が、「保育所か幼稚園かどちらが自分に合っているのかわからない」というものである。保育所と幼稚園の違いは伝えているが、学生たちは決めかねて実習指導室に来る。もちろん、学生自らが決めるべきことであり、教員がこちらがいいと決めつけることはないが、学生の話から明らかに保育所が向いている、または、幼稚園が向いているという場合もある。しかし、それでも自分ではなかなか決められない。友人がみんな幼稚園に就職するから、あるいは母親が幼稚園の方が良いと言うからという理由で、自分では保育園がいいと思っても決められない。そういう学生が毎年いる。これまで母親の言う通りにしてきた学生には、自分で決めるのはなかなか難しい。実際に働くのは自分自身であるが、母親も娘にとって良かれと

思って強く勧めるのであり、この対立はどこ家庭でもありえることであろう。しかし、中には学生Cのように深い悩みを持っていることもある。

学生Cは今まで何かを選択しようとするたびに、母親の言葉を聞いてきた。度々「あなたのために言っているのよ」と言われ、まるで母親の人生を代わりに歩んでいるように感じていた。彼女は自分の考えをしっかりと話せる学生だが、母親にはそれを説き伏せるだけの想いや力があるのである。この先も母親の思うままに生きることがすごく嫌だと、学生Cは言う。就職相談のはずであったが深く聞き入ると実は親子問題であった。この事例では、「よくお母さんと話すこと。それが言い合いになったとしても、自分の思いを伝えることが大切」と伝えた。ただ、自分の思いだけを話すのではなく母が娘を思う気持ちを理解することも大切だとも伝えた。「絶対に聞いてくれない」という彼女に、そうして後回しにすることで思いがずれていくことを指摘した。その後、数日して学生が実習指導室にやって来た。わざわざ結果を知らせるために来たのではなく、ピアノの楽譜を見に来たと言い、「そういえば」と話を始めた。彼女の母親は幼稚園の方が仕事は少し楽なのではと考えていたようだ。仕事の内容を伝えたと、幼稚園も大変なのだとわかってくれたそうだ。自分は乳児が好きで、行事が多いのはあまり好きではなく、実習した経験からも保育園がいいと彼女は考えた。今まで母親の強い言葉や、「あなたのために言っている」という言葉でなかなか自分の思いを話せなかったが、今回は自分が社会に出て働く場所なので、どうしても理解してほしかったのである。学生Cが笑顔もまじえて語る様子から、問題が解決できたことが伝わってきた。大学生であっても親から見れば子どもであり、心配であるに違いない。しかし、子どもを信じて手を放すことも必要である。それは、保育者としても大切にしなければならぬ点でもあり、保護者対応を行うときにもそういった場面に出会うことがある。そのことを学生Cに伝えたと、「はい」と笑顔で答えた。彼女が一回り大きくなったような気がした。

<事例からの考察>

実習指導室には、実習以外にも多くの話をしに学生が訪れる。一見、何の悩みもないように見える学生でも、かなり重い悩みを抱え込んでいることもある。何度か実習指導室を訪れるうちに、悩みを吐き出す学生もいる。指導するというよりも、ただ話を聴くだけのこともあるが、よく聴くことから見えてくるものも多

い。筆者は基本的にまず聴くことから始めている。本人の話をよく聴かないと物事の本質は見えない。相談が空回りしたり、学生が自分の気持ちを言えないまま、悩みを自分の胸に隠したりすることもある。実習の実務についての指導は比較的行きやすい。弾き歌いはどの曲がいいか、絵本はどれがいいのか、手遊びは何がいいのか、持っていく服はこれでいいのか、ノートの書き方・指導案の立て方等々は、今までの経験から指導することができる。しかし、学生の個人的な悩みは多岐にわたり、事情もいろいろで、答えが見つけられないこともある。

岩間(2013)はバイスティック(2006)を引用して次のように述べている。「援助関係が重要であることは、いくら強調してもよい。なぜなら、それはケースワークの効果を高めるうえで不可欠な要素であるばかりでなく、援助関係の概念は、いかなる人間も価値と尊厳を持っているというわれわれの確信から生まれ、その確信のなかに息づいているものだからである」⁽⁶⁾。学生には尊厳も価値もあり、教員が決めつけたり考えを押し付けたりしてはならない。よって、簡単に解決できないことも多い。学生の言葉の中で、少しでも何かに気付けるように心がける必要がある。何かに気付けた場合は、次に学生が相談に来たときに悩みについて再度考えるチャンスを得ることができる。しかし、一度訪れただけでそれっきりになってしまうこともある。ただ、そういう場合でも、筆者が解決できないことを別の実習指導教員が解決に導けることもあり、3人の教員が個別に話を聴くことができる利点は大きい。実際、学生は自分にとって話しやすい実習指導教員を選んで来たり、同じ悩みを3名の教員に別々に話したりすることがある。教員同士は必要な情報の共有はするが、個人の情報を漏らすことはない。3名ともに相談支援業務を行ってきた経験があり、守秘義務と情報共有のバランスに注意を払っている。

学生からの相談内容は実習に関するものや就職に関するものが多いが、最近は家庭の経済状況に関する相談もある。保護者が失業した、学費が払えないなどの相談ではアドバイザーや適切な部署と連携する。友人関係の相談も内容が複雑な場合があり、事例ごとに対処を考える必要がある。それでも実習指導室に来る学生は実習に参加する意思があり、ある程度元気がある。話す意欲すら失っている学生は、実習指導室には来ないで隠れているのかもしれない。実習は学生にとって大きな試練であるが、教員に援助を求める良い機会でもあり、それを生かしてほしいと願っている。実習指

導室の役割をすべての学生に知ってほしい。

林（2012）らは相談援助の本質を次のように述べている。「相談援助とは、緊急の場合を除いてクライアント（ここでは利用者）がパンを必要としたならば援助者はパンを差し出すのではなく、パンを手に入れる手段と一緒に考えることである。そのために必要な社会資源と連携させると同時に、利用者のパワーを高め、利用者自身がエンパワーメントしていくこと一人が基本的に持っている改善しようとする能力とパワーの回復、それを高めること一を、相互の信頼関係を通じて支援することである」⁽⁷⁾。教員は学生自身の力を信じ、学生が自ら考えて答を出せるように、そして、前を向いて頑張れるように援助していく必要がある。学生たちは、将来子どもやその保護者を支援していく立場となる。日ごろ授業の中では相談業務について学んでいるが、実習等でそれを使うことはない。実践するのは保育者となってからであろう。筆者は、学生が実習指導教員に相談する過程で、相談支援業務の大切さも学んでいってほしいと望んでいる。阿部（2012）は「担うべき保育は、子どもの最善の利益を優先的に保証する営みである。ゆえに保育者は一義的には、まず人間性が問われる。そして、子どもの最善の利益の視点から子どもと家族のニーズにどう応えうるかについて、自らに問い続ける存在である。」⁽⁸⁾と述べている。今後、学生たちが保育者となるうえで、実習指導教員は一つのモデルになるものであろう。ゆえに、実習指導教員は大きな責務を抱えているといってもよい。今後の課題の一つは実習指導室の役割を学生全員に知ってもらうことである。二つ目は、筆者たち実習担当教員が、実習の指導だけでなく相談支援を行うために、常に学ぶ姿勢を身に付けていくことであると考察する。

5. 総合考察

本学児童学部の学生は、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭資格取得という目標をもって入学している者が多い。そのために多くの単位を取得し、実習というかなり厳しい場にも主体的に参加している。実習指導室の第一の機能は、この実習に必要な知識・技術を指導することである。ただし、実習指導は単なる実務・実技の指導にはとどまらない。生活面の指導、心構えの指導、心理面でのケアも必要である。しかも実習は実習だけで完結するものではない。実習と就職は直接的に結びついている。また実習に参加することが学修全般に対する動機付けにもなっている。このため、実習指導室は実習指導のみならず、就職相談や学修相談な

ど学生からのさまざまな相談に対応して、学生生活全般を支援する業務も担っている。

安部・原田・石山（2011）は、実習指導の特徴を「横断性」という言葉で説明している⁽⁴⁾。学生はそれまで教科別に学んできたことを実習のために往来・横断して学び直す。実習指導の内容も専門性で分断されるのではなく、「横断性」が必要であるという。実習指導室はまさにこのような指導の場であり、学生が人間的なやり取りの中で総合的な指導・支援を受ける場である。実習指導室に教員が常駐する体制をとる養成機関は多くはない。しかし、来室者の人数や多様な相談内容の存在は、実習指導室が果たしている役割の大きさを示している。近年、実習そのものに関する相談、就職やその他の事項の相談ともに複雑化・多様化している。実習指導室の機能・実習指導教員に期待される役割は今後も増大し、他の部署との連携も重要になるであろう。実習指導教員としてさらに研鑽に励むことが大きな課題である。

引用文献

- (1) 朝倉千晶・天野佑紀・妙楽真悠子・多曾田理恵・古舘美咲・桜木惣吉（2017）「教育実習中の自覚症状・不安の増加に関連する要因について」愛知教育大学研究報告（教育科学編 第66号 pp. 39-41
- (2) 吉村麻奈美・高垣マユミ（2017）「女子大学生の教育実習にまつわる不安ーストレスサーおよび不安事項の詳細な検討ー」津田塾大学紀要 第49号 pp. 99-111
- (3) 阿部直美（2010）「実習指導室の役割に関する考察ー実習指導室・幼稚園実習担当活動報告を通してー」大阪樟蔭女子大学人間科学紀要 第9号 pp. 145-154
- (4) 安部 孝・原田智鶴・石山貴章（2011）「保育実践力の育成に関する考察3ー「実習指導室」の「横断性」ー」埼玉純真短期大学研究論文集 第4号 pp. 67-75
- (5) 大杉 稔・山本幸夫・田村 壽（2017）「小学校教育実習における事前・事後指導の在り方ー学生の意識調査から見た指導効果と課題ー」大阪樟蔭女子大学研究紀要 第7号 pp. 39-49
- (6) 岩間伸之（2013）『対人援助のための相談面接技』中央法規 p. 12
- (7) 林邦夫、谷田貝公昭監修（2012）『相談援助』一菽社 p. 24

(8) 阿部和子 (2012) 『保育者論』 萌文書林 p. 16

参考文献

バイステック著、尾崎 新・原田和幸・福田俊子訳
(2006) 『ケースワークの原則—援助関係の形成する技法』 誠信書房

謝辞

本稿は多くの方のご協力によって完成しました。
実習指導室の取りまとめ役である田谷千恵子先生。
質問紙調査に協力して下さった学生の皆さん、大杉
稔先生、西井典子先生、山本一成先生。データ処理に
関する貴重なご助言を頂いた北村瑞穂先生。
皆様のご厚意に深く感謝いたします。

Availability and Functions of Practical Training Room in Childcare Practice and Teaching Practice :Guidance Including Mental Support, Employment Support and Learning Support

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences
Meiko TAKAMIYA
Misa NAKAYAMA

Abstract

Childcare practice and teaching practice are extremely important for students who are aiming to become child-care workers and teachers. The content of practical guidance covers not only practical knowledge and skills but also various aspects such as mental support. At our university, a practical training room was established in 2005. Faculty members are stationed there to provide guidance on practical training at nursery schools, welfare facilities and kindergartens. The number of students visiting the practical training room exceeds 2000 per year, and the room is quite crowded just before and after practical training. Students' purpose for visiting the room is typically most related to nursery school childcare practice, followed by career guidance. Fourth-year students tend to visit the most often. Students have reported that the practical training room is useful for various kinds of practical training and career consultation. In the 12 years since the establishment of the practical training room, successive reforms of the childcare and education systems have taken place, and the courses of students have become more diverse. Teachers in the practical training room can provide individual guidance and consultation support to students, and thus various consultations about employment and learning have been requested.

Keywords: Practical Training Room, Childcare Practice, Teaching Practice, Employment Support, Consultation Support